

都市における農の活動とネットワーク化

—愛知県日進市の事例から—

愛知県立大学 松宮 朝

1 目的

都市農業は、①新鮮で安全な農産物の供給、②身近な農業体験・交流活動の場の提供、③災害時の防災空間の確保、④やすらぎや潤いをもたらす緑地空間の提供、⑤国土・環境の保全、⑥都市住民の農業への理解の醸成などの評価に基づき、政策的にも推進されつつある。その一方で、こうした都市農業の推進に対しては、地価の高い都市農地で相対的に生産性の低い農の活動を行う必要があるのか、都市農地を所有する地主の利益を生み出すだけではないかといった批判もある（松宮，2013）。本報告の目的は、こうした都市農業をめぐる議論を検討しつつ、「都市農業」としてではなく、「都市における農の活動」としてとらえ、これらの活動がどのような社会的意味を持つのかという点について、事例分析を通して考察することである。

2 方法

本報告では、都市における農の活動の重要な特性である「非農業者主体の活動」という点に焦点をあて、愛知県日進市を拠点とするNPO法人Aの事例分析を行う。日進市では、2009年に都市農業振興を目的とした「田園フロンティアパーク構想」を立ち上げるなど、積極的な推進を行っている。特に、農業後継者の拡充と耕作放棄地の解消に力が注がれており、非農業者の参入も増えてきた。その中でも2005年に結成された団体Aは、非農業者の組織化による耕作放棄地での農の活動の展開とともに、多様な地域でのネットワーク化を進めている。本報告では、報告者が2009年から継続している団体Aでの参与観察によって得られたデータを中心に分析を行う。

3 結果

データ分析の結果、団体Aでは1千万円近くの事業収入があるものの、農産物の販売による収入は年間約80万円程度であり、農産物の販売にかかわる収益によって活動が成り立っているわけではないことが明らかとなった。その一方で、農業体験講座の開設、買い物困難地域での朝市開催や、子ども菜園教室、学童の食農自然体験、高齢者認知症予防の農体験などの事業により収入を確保し、地域の様々な活動とのネットワーク化が進んでいる。こうした交流事業や地域活動への展開とネットワーク化に、都市における農の活動の社会的意味を見いだすことができた。

4 結論

以上の知見を踏まえて、都市における農の活動をどのようにとらえるのかという点に議論を進めたい。これまでの都市における農の活動に関する研究の多くは、遊休農地の利活用や都市農業の多面的機能という政策的課題に対応した評価軸によって、都市農業に関与する人の数、農業従事者、耕作面積、生産・販売量など、「農業」としての生産性の面をとらえるものが多かった。これに対して本報告では、「農業生産」、「農業経営」という枠組みではとらえることができない、都市における農の活動が持つ多様な広がりやネットワーク化を重視している。そしてこの視点が、農の活動を中心に諸活動をつなぐ、実践的方法論としての意味を持つことを示したい。

文献

碓井崧・松宮朝編著，2013，『食と農のコミュニティ論』創元社。

松宮朝，2013，「都市における農の活動をめぐって」『愛知県立大学教育福祉学部紀要』61:123-134。